

書 評

中西僚太郎著『近代日本における農村生活の構造』

古今書院、2003年2月

A5判、310頁(図78枚、表59枚)、7500円

評者は私的ながら院生時代において本書に出てくるところの山形の善治日記に書かれた農家経営と史料価値について講義をうけたことがある。

まず本書から感銘をうけた点は、①日記の期間1911～1934年茨城県結城郡西豊田村、中島光一日誌と、1912・13・22～79年長野県南佐久郡桜井村、白田彦四郎日記を中心に、ほかに山形の善治日誌、神奈川の相沢日記、新潟の西山光一日記(13頁)、併せて5事例村落の生活を深く比較検討・分析していること、中島・白田両家の資料閲覧の協力があったとはいえ、たいへんな労苦であること、これだけ地域の長期間の多くの日記・日誌類を収集・分析していること、②表題の「農村生活」の「生活」の部分について事例村落を労働を基軸とした経営と生活の構造というゆるいしばりの概念で示し、それを図示(8頁)していること、人文地理学研究で農村「生活」の構造を明らかにすることがいかに困難であるか、がわかるがゆえにである。しかも戦前の状況であること、③第2章にて「郡市町村別米統計表」「農作業慣行調査」、松井勇の農業経営類型(1938年)等をつかい全国レベルの分布図を用いて1920年代末～1950年における農業の生産・経営の地域性を明らかにしていること、である。ことに実態を明らかにしうる史料が極めて限られるなか、史・資料の収集をとっても深い技術が問われる歴史地理学の分野で、著者はご苦労されたことが理解できるのである。

つぎに評者が本書の書評を試みた理由、等についてである。評者は、さきに戦後高度成長期の農村を酒造出稼ぎを指標にした地域分析に関する拙作を出版する機会をえた¹⁾。そのなかで出稼ぎの2つ目の展開時期として明治から昭和初期に至る時期をあげ、特徴として出生数の急増が地主制のもとにある農山村の過剰人口の堆積を生み、次・三男、女性といった家計補助的労働力となるものをあげた。①本書はその1910年代～1930年代前半の農村の経営と生活のありようを課題としていること。②評者のさきの書籍のなかで戦前1934

年を中心とした出稼ぎ労働を分析していることである。評者は江戸時代から戦前における農山村の出稼ぎ現象を分析する際の史・資料について関心をもっているが、それは、宗門改帳、日記・日誌類、地方文書、統計類等が考えられよう。これに関してさきに大著を出版した溝口常俊²⁾は甲州西野村の宗門改帳、甲州の中込『源吉日記』を駆使して江戸時代の奉公人や百姓移動を究明しているし、本書は日記類を駆使して分析を進めていること、等である。

本書執筆の基本的課題は、明治中期以降産業発達の第二期、即ち第一次大戦以降昭和恐慌前までの大戦景気とその後の経済停滞の時代を挟んだ1910年代から1930年代前半(明治末期～昭和初期)における農村の経営と生活のあり方を、地域の個別具体的な事例を通じて解明することである。第二の課題は、個別的な事実を扱いながらも、1910年代前半の農村における経営と生活面の時代的特質を解明することである、とする。

本研究の目的は、以上の課題をふまえて、1910年代から1930年代前半の複合経営地域における経営と生活の全体像を、労働を基軸として構造的に把握し、その時代的特質と地域性、地域像を明らかにすること、としている。

本書の叙述の展開は以下のようなものである。

第2章では、全国レベルの分布図を用いて、1920年代末～1950年における日本の農業生産と農業経営の地域性を明らかにする。

第3章では、佐久盆地の小作農本家白田家と鬼怒川流域の自作兼小地主本家中島家の複合経営の実態を詳述する。

第4章は両地域の技術・労働の性格ならびに、労働力の構造の分析にあたる。

第5章は両家の労働と休養・余暇活動からみた生活リズムの分析である。

章立ては以下のようになっている。

第1章 序 章

第1節 研究の課題と目的

第2節 研究の方法・視点

第3節 資料と研究対象地域

第2章 近代日本農業の地域的展開

第1節 農業生産の地域性

- 第2節 農業経営の地域性
- 第3章 土地所有と経営の構造
 - 第1節 佐久盆地における稲作複合経営
 - 第2節 鬼怒川流域における畑作複合経営
 - 第3節 小括－農業経営の地域的性格
- 第4章 農業技術・労働と労働力の構造
 - 第1節 白田家における家族労作経営
 - 第2節 中島家における家族・年雇労作経営
 - 第3節 小括－農業技術・労働と労働力の地域的性格
- 第5章 日常生活の構造と変容
 - 第1節 佐久盆地における稲作と新暦の生活リズム
 - 第2節 鬼怒川流域における畑作と旧暦の生活リズム
 - 第3節 小括－生活リズムの地域的性格
- 第6章 結論

両地域において養蚕の盛んな程度は異なるが、ともに耕種農業と養蚕が経営の柱になっている複合経営地域であるといえる。

まず指摘できるのは、副業発展による経営複合化の進展である。佐久盆地・稲作複合経営の桜井村の場合、経営の零細性（1戸当たり6～8反）は耕地の集約的な利用をもたらされ、養蚕の一層の発展がみられ、稲田地区の養鯉業と養豚の顕著な発展がみられた。鬼怒川流域・畑作複合経営で、経営規模が大きく、粗放的な耕地利用の西豊田村では、副業の展開は緩慢だが、養蚕の一定の展開やビール壺依製造の発達があった。両村では1910年代から1930年代前半には、中下層農家の経済的地位は上昇する傾向にあり、階層間の経済的格差は縮小傾向にあった。

経営の複合化、農外就業の増加は、それまで9月にみられた農閑期を消滅させ、旧来の年中行事を変え、ムラの祭日を変更させた。その結果、白田家の場合、慣行休日は1930年代前半には15日程度にまで減少（1911・12年19日が1933・34年15日へ）する。これは近世期や今日からみても明らかに少ない、著しく勤労が強化された時代であった。それから1910年代～1930年代前半の農業技術が、労働生産性の向上という面では停滞的であったことである。新品種の導入、大豆粕・購入肥料の利用増加など、土地生産性の向上の面で

は相当な進歩がみられた。両家では1920年代～1930年代にかけて、臨時の入労働について分家や親類からの手伝い労働は減少し、日雇労働が増加する傾向が共通して認められた。これは、人々の意識のなかに、労働は金銭価値をもつという考えが浸透していったことが一因となっていた、と考えられる。

評者が感じた、本書でとくに分析力の優れている図表と分析箇所をあげてみよう。図2-6畑における桑園の比率（1929年）、図2-7畑における麦類の作付比率（1941年）、図2-10全国の郡別の農業経営類型（1938年）、表2-3府県における人耕牛馬耕の場合、以上のうち3つは全国的視点から状況をよく把握している。図3-6中桜井と北桜井周辺の土地利用（1890年頃）。図3-12中桜井の農家組合員の田畑耕作面積と繭収量（1932年）。図3-14白田家耕作地の分布。図3-18佐久盆地の稲作複合経営における各部門の結合関係、これは、著者によると1930年代中頃三澤勝衛のいう連環式経営を実践していたという。図3-28中島家のある粟野と粟野新田の土地利用（1888年頃）。図3-31粟野における戸別の土地所有面積の推移。表3-25中島家の所有地面積の推移。図3-34・35中島家の田畑分布・畑作物の作付割合。図3-38中島家の畑作物の輪作形態。図4-1・3白田家の経営部門別、水稻作業別労働量の推移。図4-7白田家の経営部門別・労働者別の労働日数。表4-3・4白田家、入労働・出労働。図4-8・9中島家の経営部門別、水稻作業別労働量の推移。表4-8中島家の農業年雇の推移。図4-15中島家の経営部門別・労働者別の労働日数。表4-9・10中島家、入労働・出労働。図5-1・2・3白田家の農事暦。表5-1・2・3白田家の日記にみる年中行事・娯楽・休日。図5-5・7・8中島家の農事暦。表5-6・7・8中島家の日記にみる年中行事・娯楽・休日。表5-9中島家日記の年中行事の記述内容。図5-11中島家の農繁・農閑期と年中行事との関係、等である。第3章に配した図表が70枚と全体のなかで膨大であり、土地所有と経営の構造の解明に力点がおかれている。また両家の土地所有と経営、農業技術・労働・労働力、日常生活等が図表でよく比較、対照されていることがわかる。

日記にみる年中行事・娯楽・休日について評者

が目につくところをあげる。白田家より、1912年新暦9月13日（以下同）夕飯後、御大喪式に彦（四郎）・父立会。同年11月22日今日より三日間、秋休みにて餅をつく。1919年頃2月11日紀元節。官衛学校等において祝賀式。1923年9月1日12時10分前大地震。夕方から彦警備で村内廻り、寝ずに夜警。同年11月25日餅二臼つき。秋休みは23～25日の3日間。1933年2月10日午後、彦前山学校へ農村更生問題についての話を聞きに行く。同年10月8日白田で南佐久郡戦死者慰霊祭。

中島家より、1911年4月3日神武天皇祭に付兄休業。光（一）佯装競技会に出張。1922年4月5日光西豊田第一尋常高等小学校で、国家の富強と題する講演を聴講。同年6月29日早苗振りをなせり。同年8月8日祇園祭雇女午後休業。雇男一日食事後寝通し。1934年4月24日今晚庚申講をなせり。

新暦導入の理由としては佐久地方では在方商人が生糸・蚕種の「江戸商い」に従事する商取引上の必要から。中島家では新暦で正月を祝うのは1960年頃からであるという。佐久地方より遅い。

最後に評者はいくつかの点について、感想をあげる。①構造ということばの多用について。図1-1経営と生活の構造の概念図について、瑣末なことではあるが、図題に構造を使っているであるならばCは労働力の構造ではなくて、労働力の「構成」であろうか。それとも大範疇の構造と小範疇の構造をいうのであろうか。以下にも構造ということばが使われるがその意味、内容が若干不明確のようである。著者は18頁[注]のところで「経営」とは、土地利用、作目構成、農業技術、労働力構成、経営収支のありかた等、農業経営全般

にわたる事柄であるとし、本書では最も頁数をさいていることばである。291頁で本研究は「経営と生活の全体像を、労働を基軸として構造的に把握し」とある。図1-1経営と生活の概念構造が本書の表題「農村生活の構造」の内容であろうか。評者は「農村生活の構造」という場合は、経営に影響を与えた9頁で著者が述べた「政策」や「産業段階」が入ってくると考える。そうしなければ著者がいう第二の研究課題としての時代的特質が解明（6頁）できないであろう。明治末期の地方改良運動と昭和恐慌期の副業の奨励、経営の複合化が掲げられた農村経済更生運動がそうである。②土地所有についての記述部分の多さについて。具体的には85～93頁では白田家について、125～141頁では中島家について、複合経営のなかで経済的な「土地生産力構造」ということばを小節の題目に使用している理由は何であろうか。使ってもいいとして各章の執筆頁数をみると本書の解明する中心であるべき第4章の労働・労働力、第5章の日常生活の構造と変容に比べて、第3章土地所有と経営部分が多いのと関連するの。③第6章結論296頁のところで「都市への出稼ぎ」という文言があるが、本文で具体的分析・展開がないようだが。しかしながら、評者の感想は瑣末なものである。最後に是非とも、本大著を日本の農業経済・経営学を学ぶ諸氏におすすめしたい。

（松田松男）

【注】

- 1) 松田松男『戦後日本における酒造出稼ぎの変貌』、古今書院、1999、316頁。
- 2) 溝口常俊『日本近世・近代の畑作地域史研究』、名古屋大学出版会、2002、391頁。